

6月15日（月）サムエル記第二15章13～17節

「さあ、逃げよう。そうでないと、アブサロムから逃れる者はいなくなるだろう。すぐ出発しよう。彼がすばやく追いついて、私たちに害を加え、剣の刃でこの都を討つといけないから。」

（14節）

ダビデのところにきて「イスラエルの人々の心はアブサロムになびいています。」と告げる者がいたことで、ダビデはアブサロムの謀反を知りました。そしてエルサレムから離れるように家来全員に告げます。そして、王と王に従うすべての民は、出て行って町外れの家にとどまりましたが、恐らくそこでこれからのことを考えようと思ったのかもしれません。ダビデがエルサレムを離れた理由については諸説あります。ダビデは、エルサレムでアブサロムを迎え撃つことができたはずだと言う人もあり、父と子での内輪の争いをエルサレムの人々に見せることで王としての権威が失墜することを避けたかったのではないかとという人もあります。しかし14節で、「彼がすばやく追いついて、私たちに害を加え、剣の刃でこの都を討つといけないから。」とありますので、アブサロムとの戦いによって自分たちの身に危害が及ぶこととエルサレムの町が破壊され、戦闘の巻き添えによって多くの人が傷つくのを避けたかったのではないかと思います。ダビデは、以前に自分の命を狙うサウルの手から逃れて逃避行を続けましたが、再び息子アブサロムの謀反のために、その手を逃れてエルサレムを離れることとなりました。自分の息子の謀反という意味では、サウルのときよりもつらかったかもしれません。アブサロムの謀反は、ダビデにとっては突然であり、なぜという思いも強かったことでしょう。いろいろな思いがダビデの心の中にはあったはずです。私たちも日々のあゆみの中で、やりきれない思いにさせられたり、なぜこんなことがと思うような場面に遭遇するかもしれません。しかし、そのような中であってもすべての出来事は主の御手の中にあることを信じて、主にゆだねつつ歩ませていただきますしょう。

6月16日（火）サムエル記第二15章18～23節

「主は生きておられます。そして、王様も生きておられます。王様がおられるところに、生きるためでも死ぬためでも、このしもべも必ずそこにいます。」（21節）

18節ではダビデとすべての家来たちは隊列を整えて進んで行きました。そしてクレタ人、ペレテ人、六百人のガテ人の外国人たちも、そこに加わっていました。そのガテ人たちの中にイタイがいました。彼は後にヨアブとアビシャイとともにダビデの軍隊の総指揮をすることに

なります。(18章2節) ダビデは、彼が異国人で亡命者であり(19節) 昨日来たばかりなのに、あてのない旅で、一緒にさまよわせるのは忍びないということで、戻るように勧めます。ここからダビデが、常に自分の周りにいる者たちに細心の注意を払い、いかに心を配っていたか分かります。少なくともダビデの中には外国人だからというような差別的な思いは一切なかったことでしょう。しかし、イタイはダビデに「主は生きておられます。そして、王様も生きておられます。王様がおられるところに、生きるためでも死ぬためでも、このしもべも必ずそこにいます。」と言いました。(21節) その返答を聞いて、ダビデはイタイがともに進むことを許します。

私たちがイタイの立場であればいかがでしょうか。あてもなくさまよい歩くような先の見えない中を自ら進んで行きたいとは思わないでしょう。教会の歩みもまさに先の見えない中を進んで行くようなものです。しかしダビデの逃避行と異なるのは、私たちは決してさまよう歩みではないということです。むしろ、御国という最終目的地を目指して進んでいます。ですから、私たちはイタイのように、イエス様がおられるところに、生きるためでも死ぬためでも、このしもべは必ずそこにいますと言える者でありたいと思わされます。そして、他の兄弟姉妹と離れることなく、またイエス様のもとを決して離れず、隊列を整えながら、まっすぐとともに歩んでまいりたいと思わされます。

6月17日(水) サムエル記第二15章24～29節

「神の箱を都に戻しなさい。もし私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいを見させてくださるだろう。」(25節)

23節で「王はキデロンの谷を渡り、この民もみな、荒野の方へ渡って行った。」とありますが、その中にはダビデの祭司であったツアドクとすべてのレビ人がいて、彼らは契約の箱を担いでいました。そして民がみな都から出て行ってしまうまで、彼らは神の箱を降ろし、ダビデと民の旅の安全を願うために、祭司エブヤタルがささげ物を献げました。しかし、25節でダビデはツアドクに神の箱を都に戻すようにと命じます。これは、この危機的状況の中にあっても神の箱が必要とはダビデが思っていなかったということです。むしろ「もし私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいを見させてくださるだろう。」と言いました。つまり、ダビデは自分の身の安全も将来も、そして命もすべてが主の御手の中にあると信じていたのです。ですから、主がみこころにより無事エルサレムに帰してくれることもあるだろうし、「もし主が『あなたはわたしの心になかない』と言われるなら、自分

が滅ぼされることもあるだろうということです。

私たちは、問題や試練が訪れた時、また危機的状況の中で何かに頼ろうとします。しかし私たちは頼りにならないものではなく、むしろ確かな助けを与え、私たちをどのような中にあっても守り支えてくださる主に頼るべきです。それと同時に、私たちのすべては主の御手の中にあると謙遜に信じなければなりません。どちらかと言いますと、大変な中にいる自分を神様は助けてくださるべきだという横柄な態度で主に要求するようなところはないでしょうか。主には私たちを助けなければならない義務はありません。ですから、主が助けてくださったなら、それはただ主の恵みであって私たちはそのことに感謝するしかできないのです。

6月18日（木）サムエル記第二15章30, 31節

「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」（31節）

ダビデはオリーブ山の坂を登りましたが、泣きながら、頭をおおい、裸足で登りました。彼とともにいた民も同じように頭をおおい、泣きながら登りました。息子アブサロムの謀反によりエルサレムの王宮を追われることが、ダビデにとっては大きな悲しみとなったことでしょう。その悲しみに追い打ちをかけるように、「アヒトフェルがアブサロムの謀反に荷担している」と知らされました。12節を見ますと、アヒトフェルはダビデの助言者でした。ありえない裏切りをダビデは受けたわけです。その時に彼は主に向かって「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」と祈りました。

私たちは、自分でどうすることもできない状況に陥った時に、あきらめたり絶望する必要はありません。私たちは、主に祈ることができます。主に祈りの手をあげましょう。その一方で、自分にはどうにもできないことであっても、主は全能の御手をもってどんなことでもすることができます。アヒトフェルは、もともとダビデの助言者であった人ですから、知略家で、さまざまな知恵を使って助言できる人だったのでしょう。しかし、主はそれ以上の知恵を用いて、アヒトフェルの助言を愚かなものにすることができます。ある祈りの本に、自分ができないと思うと、あたかも神様も自分と同じようにできないはずだと言わんばかりに祈ろうとしないと書かれてありました。私たちができないことを今日主に祈りましょう。私たちがあきらめていたことを今日ともに主に祈りましょう。そして、これから祈りの手を上げ続けていくことにより、主がみわぎを通してご自身の栄光を現わしてくださったなら、それを周りの兄弟姉妹にぜひ証ししてください。それは、必ず大きな励ましとなるはずです。

6月19日（金）サムエル記第二15章32～37節

「しかしもし、あなたが都に戻って、アブサロムに『王よ、私はあなたのしもべになります。これまであなたの父上のしもべであったように、今、私はあなたのしもべになります』と言うなら、あなたは私のためにアヒトフェルの助言を打ち破ることになる。」（34節）

ダビデが礼拝する場所になっていたオリーブ山の頂に来たとき、アルキ人フシャイが嘆きの表現として上着を引き裂き、頭に土をかぶってダビデに会いに来ました。37節でフシャイは、「ダビデの友」と呼ばれていますが、まさに「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください」とのダビデの祈りに主が答えてくださった結果として、主はフシャイを遣わされたのです。主は、さまざまなかたちで祈りに答えてくださいますが、助け人を送ってくださることも主の祈りの答えの一つです。個人的に、また教会全体で助け人を必要としていることはないでしょうか。主がそのような人を送ってくださるようにともに祈りましょう。

33節でダビデはフシャイに対して「もしあなたが私と一緒に行くなら、あなたは私の重荷となる。」と言いました。もしかするとフシャイは高齢だったのかもしれませんが、体力的な問題をかかえていたのかもしれませんが、ですから、ダビデとともに行動することはできなかったのですが、別の大切な使命が与えられました。それはアヒトフェルの助言を打ち破るための働きでした。ダビデは、フシャイにエルサレムに戻ってアブサロムに、あなたのしもべとなりますと言い、王の家から聞くことは何でも祭司ツァドクとエブヤタルに告げるようにと言います。そして彼らの息子アヒマアツとヨナタンを通して聞いたことがダビデに伝わるようにしたのです。要は、フシャイにスパイ行為を行うように命じたのです。

もしかすると、自分は教会の中で重荷となっていると思われる方がいるかもしれません。しかし、教会の中には重荷となる人は誰もいませんし、神様にとって重荷である人は誰もいません。フシャイがダビデに用いられたように、主の教会の中には必ずふさわしい働きがあります。そして、私たち一人ひとは他の兄弟姉妹たちの信仰の友となって祈り、励ますことができます。フシャイがダビデの友であったように、あなたは誰の友となることができるでしょうか。

6月20日（土）サムエル記第二16章1～4節

「見よ、メフィボシェのものはみな、あなたのものだ。」（4節）

ダビデが山の頂から少し下って来たところで、ヨナタンの息子で足の不自由なメフィボシェ

テのしもベツィバがダビデを迎えに来ていました。ダビデはツィバにメフィボシェテに与えた財産の管理を任せていました。(9章9～11節参照) ツィバは、ろばにたくさんの食糧やぶどう酒を載せていました。ツィバが来ていたことにダビデも驚いたことでしょう。彼に「これらは何のためか」と尋ねると、ろばは王の家族が乗り、食料は王の一行が食べるためだと答えます。さらにダビデはツィバに「あなたの主人の息子はどこにいるのか」と尋ねます。9章9、10節でもメフィボシェテのことを「あなたの主人の息子」と呼んでいます。ここでもメフィボシェテを「あなたの主人の息子」と呼び、「どこにいるのか」と尋ねます。おそらくツィバとともに近くまで来ていると思ったのでしょう。それに対してツィバは、「今、エルサレムにとどまっております。『今日、イスラエルの家は、父の王国を私に返してくれる』と言っておりました。」と答えます。恐らくアブサロムの謀反に乗じて、メフィボシェテはエルサレムでサウル家の再興を計ろうとしているということなのでしょう。しかし、以前ダビデの前で「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださるとは」(9章8節)とまで言ったメフィボシェテが本当にそんなことを言ったのか確認させることも必要だったとは思いますが、アブサロムがエルサレムに入る前に早く逃げなければならないダビデにとっては、そのような余裕がなかったのかもしれない。そしてダビデはツィバに「見よ、メフィボシェテのものはみな、あなたのものだ。」と言い、メフィボシェテに与えた財産をツィバに与えてしまったのです。もしアブサロムの謀反という混乱を利用して、メフィボシェテの財産を自分のものにしようとツィバが企んでいたとしたなら大成功だったと言えます。

自分に危機が迫っている時やどうしてもいかに分からない時などは私たちはどうしてもあわててしまいます。そのような時に焦って物事を判断したり、行動したりすると失敗することが多くあります。そのような時にこそ落ち着いて主の御前に祈り、主のみこころや判断を求めるべきです。

6月21日(日) サムエル記第二16章5～14節

「おそらく、主は私の心をご覧になるだろう。そして主は今日の彼の呪いに代えて、私に良いことをもって報いてくださるだろう。」(12節)

ダビデ王は、さらに進んで「バフリム」まで来ると、そこに別の人物が登場します。それは、サウル家の一族の一人でその名をゲラルの子シムイという者でした。あらためてアブサロムの謀反は、さまざまな人々に影響を与えていることが分かります。彼は、ダビデとその家来たちに向かって石を投げつけました。彼はダビデを呪い、「出て行け、出て行け。血まみれの男、よ

こしみな者よ。」と呼び、アブサロムの謀反は、主がサウルの家のすべての血に報いた結果であり、サウルに代わって王となったダビデに対して主は息子のアブサロムに王位を渡した結果だと言います。このシムイの呪いについては、サウルやヨナタン、そしてアブネルやイシュボシェテの死についてダビデは直接関わっていたわけではないのですが、シムイはすべてダビデの責任であると考えたのでしょうか。ダビデを護衛していたツエルヤの子アビシャイが、シムイを無価値な存在という意味で「死んだ犬」と呼び、シムイの首をはねると言いました。しかし、10節で、これはダビデ個人に関わることであって、あなたたちには関係がないと制止します。むしろ「彼が呪うのは、主が彼にダビデを呪え」と言われたからだと言い、11節では「彼に呪わせなさい。主が彼に命じられたのだから。」と言います。主がダビデを呪うように言われたり、命じることにより、シムイにそのようなことをさせたのかと驚かれるかもしれませんが、ここで言われているのは恐らくシムイの呪いなど、どんなことであっても主の許しの中で起こっていることであって、そのことを認識しなければならないということなのでしょう。みこころであれば、シムイがそのようなことをさせるのをやめさせることができたにもかかわらず、シムイがダビデに呪いの言葉を口にするのは、主が許されているからだと言えそうです。私たちも、自分の周りに起こるどんなことであっても、その背後に主がおられることをおぼえましょう。

ところが12節では「主は私の心をご覧になるだろう。そして主は今日の彼の呪いに代えて、私に良いことをもって報いてくださるだろう」と言います。ダビデは自信をもって、主が自分の心をご覧になれば、呪いに代えて良いことをもって報いてくださると言っているのです。ダビデが普段からいかに主を恐れながら過ごし、自分の言動だけではなく、心をも見られる主の御前に、心にまで気を配っていたことが分かります。私たちも主への信仰による確信をもって、心をご覧になる主は、呪いに代えて良いことをもって報いてくださると言えるのでしょうか。そのような信仰生活を歩ませていただきたいと願われます。